

## 論文

# 高校・大学の歴史教育における地域遺産の活用

高橋明裕

### 要旨

高校・大学の歴史教育において、地域の教材は十分に扱われていない。高校生・大学生の地域の歴史に対する認知度は高いものではない。現在、地域遺産を活用することによって、地域の歴史の総体を明らかにするような研究が進展している。高校、大学の歴史教育においても、地域遺産を活用した教育実践を追究していく必要がある。その実践例を示す。

### キーワード

歴史教育、地域遺産、歴史遺産、地域史

## 1. 身近な地域の歴史学習をめぐる現状と課題

本稿は、私たちが歴史をたどるための多様な素材となる歴史的な遺産（以下、歴史遺産）、及び地域に残されてきた自然や人々の歴史的な営みの証となる地域の遺産（以下、地域遺産）が、歴史研究における歴史資料に対する多様なまなざしの進展と研究方法の発展によってますます重視されてきているとの認識に立っている。そうした遺産は学際的にも共同の財産となりつつあり、さらに地域に住む住民自身にとっても自らの地域の歴史を掘り起こし地域に対する認識を新たにしようとするうえで注目され、そうした地域の運動が高まっているとの現状認識をもっている。本稿はそれらに鑑み、歴史教育において従来から追究されてきた身近な地域の歴史への着目、地域遺産を地域史教材としてさらに活用していくことの意義とそれにもとづく歴史教育上の課題について考察するものである。

## 2. 中等教育・社会科における地域

現行の中等教育つまり中学校社会科と高校地理歴史科における地域の歴史、「地域」の扱われ方を学習指導要領にみとくこととする。なお本稿では高校地歴科に関しては前近代史をめぐる実践上、日本史Bを考察の対象とする。

現行2009年版の高校日本史Bにおいては「2 内容」の項に地域史の扱いに相当するものはほとんどない。「(1) ウ 古代国家の推移と社会の変化」の項に「荘園・公領の動きや武士の台

頭など諸地域の動向」とある程度である。「3 内容の取扱い」の項に「(1) ウ 地域の文化遺産」、「オ 地域社会の歴史と文化について扱うようにする」とあるだけで、日本史においては地域の扱いが極めて弱い。実は1999年版では「2 内容」に「(1) 歴史の考察」という導入的項目があり、そこでは「地域社会にかかわる学習を通して、歴史への関心を高め、歴史的な見方や考え方を身に付けさせる。」とあり、「ア 歴史と資料 (イ) 資料にふれる」に「地域の文化遺産についての関心を高め」とある。さらに「ウ 地域社会の歴史と文化」の項に「地域社会の歴史と文化について、その地域の自然条件や政治的、経済的な諸条件と関連付けて考察させる。」とあり、「地域社会の歴史」に対する視野、「自然条件」などを含めて歴史を総体としてみる視野を有していたといえる。2009年版ではこの「(1) 歴史の考察」という導入がすっぱりカットされてしまっている。これは2009年版学習指導要領では表現や言語活動が重視されたため、「歴史と資料」は残されたが「歴史の考察」はカットされたものと考えられる。ただし、『学習指導要領解説』は地理A・Bの「1 目標」に「歴史的背景」を新設し、「2 内容 (1)」に「地域性や歴史的背景を踏まえて考察し」とあるなど、「地理歴史科では、科目間の関連の重視」を基本的な考え方として改訂したと説明している。そのこと自体は評価できると考えるが、日本史A・Bについて従来から強まっている伝統・文化についての認識の深化、歴史を文化史偏重で学習させる傾向が一層進められたものといえる。

中学校社会科においては現行版でも歴史的分野の「1 目標 (2)」に「歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を、その時代や地域との関連において理解させ、尊重する態度を育てる。」「(4) 身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め」とあり、「2 内容 (1) 歴史のとらえ方」では、「イ 身近な地域の歴史を調べる学習を通して、地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに、受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め、歴史の学び方を身に付けさせる。」とある。伝統・文化尊重路線ではあるが、「身近な地域の歴史」を「具体的な事柄」を通して理解させようとしており、地域史教材によって歴史に関心を持ち、考察し、歴史像を構築する志向をもっている点が評価できる。「身近な地域の歴史」、郷土への着目は、1958年版改訂で示されて以来のものであり、かつては「たとえば、都市や集落、道路、地割、城跡などの地域の歴史的景観を把握させる」(1969年版)のように、地域の歴史遺産の活用がさらに具体的であったが、近年の文化史偏重、伝統・文化路線の傾向のなかで後退してきている<sup>1)</sup> といえ、中学校社会科では「身近な地域」への着目が未だ重要視されているといえることができる。それに比べると高校地歴科では「身近な地域」の歴史遺産の活用が学習指導要領上ははなはだ弱いといえることができ、今日「地域」「歴史」「遺産」などの語が重視されるようになり、地域社会と環境における歴史遺産を保全・活用していこうとする動向の中で、歴史教育が意識的に教材開発、教育実践を工夫していかなければならない領域である。

### 3. 歴史学における地域 (地域史)

歴史教育、学習指導要領の社会科における地域史の扱いは、かつての文言としては「郷土」であったのが1977年版学習指導要領からは「地域の開発に果たした先人の働き」、「身近な地域」

など、「地域」へと変わった。それと関わって歴史研究、歴史学においても地域概念の変遷をたどることができる。戦後の歴史学は戦前の郷土史研究の反省をもって再スタートした。とりわけ、1950年に創立された地方史研究協議会は、1952年の第3回大会において桑原正雄が「社会科における郷土教育の実践」を報告しているなど、新しい社会科教育を実践しようとする教員と地域の歴史研究者の共同の場としてスタートしたといえる。やがて、社会科教育における「郷土史」教育のあり方をめぐる批判とともに戦前の「郷土史」研究への批判的検討が歴史学においてもなされていく。地方史研究協議会が編んだ『地方史研究必携』（岩波書店、1952年）では、戦前の「郷土史」について①お国自慢的、②民衆の視点の欠落、③歴史と伝統の混同、④日本歴史の中核である中央の歴史事象と結びつける限りでの地域の歴史事象への関心の集中、という弊害を指摘している。こうして戦後の歴史学は地域を対象とした歴史研究について、戦前の「郷土史」概念に替わって「地方史」を標榜することとなるが、「地方史」概念もその後、検討の俎上にのせられることとなる。

日本史研究の動向を反映した講座シリーズは、概ね10年間隔で岩波書店と東京大学出版会より刊行されているが、岩波講座に地域の歴史研究を方法的に論じた論文が初めて収められたのは1975年から刊行された『岩波講座日本歴史』においてであり、それは塚本学「地域史研究の課題」であった<sup>2)</sup>。塚本論文は戦前の「郷土史」研究に対して戦後から1970年代ごろまでの地域を対象とした歴史研究を「地方史」概念として把握したうえで、この「地方史」についてもかつて『地方史研究必携』（前掲）が指摘した「郷土史」の弊害の④、つまりあくまで既成の中央中心の歴史（中央史）を前提とした「地方史」である点を批判した。1970年代末以降、自治体史編纂事業の推進、歴史資料の保存・利用機関の整備、地域の文化財保存を求める住民運動と歴史研究者の共同などが進展した。これらを土台に、地域を対象とした歴史研究が新たな段階に入りつつあるとして、その地域独自の歴史を既成の中央史との関わりのみでとりあげるのではなく、地域民衆の視点や、地域に残された歴史資料・文化財（地域遺産）をもとに当該地域の歴史的個性を明らかにするような、地域を舞台とした歴史研究を「地域史」「地域生活史」の概念で把握することを提唱したのである。それらの動向は、1990年代の講座シリーズである『岩波講座日本通史』の『別巻2 地域史研究の現状と課題』（岩波書店、1994年）として結実し<sup>3)</sup>、そこでは北海道から沖縄まで、遺跡・景観・文化財の保存のあり方と運動、地域社会と民衆運動、自治体史・歴史学習運動の先進事例、戦争の体験記録と地域史の掘り起こしなど、さまざまな事例の紹介と研究の課題が明示されている。地域史の掘り起こし、地域史編纂、文化財保存運動など、歴史に関わる住民運動と歴史資料の保存・利用・公開態勢の整備として地域史研究が進展してきたことが窺えるが、残念ながらその巻には学校の歴史教育に関わる事例は含まれていない。

地域史研究は、地域の文化財の保存・活用と従来の文献史料以外の歴史資料へ着目という研究方法上の進展も果たしてきた。荘園村落の現地調査を踏まえた史料分析、航空写真・地図・絵図・地籍図などを駆使した景観の歴史的復元、歴史地理学・自然地理学による地形環境の影響や考古学的調査にもとづく遺跡分布からの歴史復元、小字地名などの歴史地名への着目、石塔、宗教的遺物、墓地、寺社・祠堂などを含む民俗学的調査の援用、村落に住んだ人々の生活史的視点からの村の歴史そのものへの着目、などである。これらの研究史上の画期となったのは、農業史の研究者である古島敏雄の『土地に刻まれた歴史』（岩波書店、1967年）と、近世史研究者の木

村礎『村落景観の史的研究』（文明堂、1988年）であったといえよう。古島は日本の国土の景観形成の歴史から国土開発の歴史的特徴を解き明かそうとし、前掲の様々な研究手法を駆使した木村たちの共同研究は、個別村落の景観を包摂する「地域景観」の概念を提唱した。今日、古代史から近代史に至るまで多くの個別遺跡調査、現地調査や自治体史編纂ではこのような景観復元の研究手法が駆使されており、また自治体史や博物館などでは歴史的な絵図や地形情報に関する地図・資料集、地名集などが刊行され、地域史研究の素材を提供している。これらを土台とした各時代・テーマ別の地域史研究が蓄積されてきている。

近年の動向としては、このような総合的現地調査の手法による歴史復元は「環境歴史学」と銘打たれることが増えてきた。歴史学が今日の環境問題を視野に入れて歴史的な生活の場を環境の視点から再構成・再評価する動きの一環といえようが、この研究動向が新規なものであるというよりは、これまでの景観研究や地域史研究の延長線上にあることが了解できよう。荘園現地調査を早くから主導していた飯沼賢司は、その「環境歴史学」を現地調査の方法にもとづく、開発史、産業史、経済史、政治史、宗教史を総合した、累積された村落周辺景観の歴史環境の総体を明らかにする研究であると定義している<sup>4)</sup>。それは旧来の史跡概念から「文化的景観」へと研究対象を概念的に拡大したものとなっている。

なお、『土地に刻まれた歴史』の著者古島敏雄が戦後の地方史研究（地域史研究）のあり方を論じた際、当時実践されていた社会科単元学習に注目し、「今日近代地方史が求められる第三の姿（旧来の狭い意味の地方史と区別された、今後追究されるべき地方史＝地域史研究の姿 筆者註）が、戦後の教育活動の実際の動きの中にある。それは社会科教育としてははじめられたものと結びつくのであり、或はその批判として出てきたものの中に生きているのである。」と述べていることは<sup>5)</sup>、歴史教育における身近な地域の歴史の取扱いと地域史研究の方法との共同、架橋の必要を考えていた点で注目される。

#### 4. 歴史教育における地域遺産の活用

##### (1) 歴史像の構築と教材としての地域

筆者は日本古代史を専門領域としながら、2011年度は一般教養科目の歴史に該当する「新しい日本史像」（受講生は立命館大学の文系学部と理系学部）、教職専門科目の「(教)日本史I」（前近代日本史。受講生は史学専攻以外の文系学部）を担当している。また、神戸市外国語大学でも語学系学科における総合文化コースの「日本文化論入門（地域と文化）」を担当している。2011年3月、筆者たちは日本古代史、考古学の研究者による共同研究にもとづき、神戸・阪神間の古代地域史に焦点をあてた『神戸・阪神間の古代史』<sup>6)</sup>を刊行し、上記講義においてテキストとして活用している。同書は「ミナト神戸」、「国際港湾都市・神戸」といった地域性や地域文化にのみ焦点があてられがちな神戸・阪神間地域の歴史を見直すとともに、古代における海上交通、港湾機能、河川交通、六甲山北麓の東西交通の観点から教科書的な日本古代史像の見直しを迫ることを意図している。なおかつ、海岸、山岳、河川、台地などの地形環境を舞台にした歴史の展開、及び温泉、巡礼地、寺社、自然信仰の対象物、伝説の舞台や遺跡などの文化的景観を地域遺産とみなすことにより、地域の歴史像を再構築している。同書を通じた教育実践により、教育目標と

しては、教材としての地域遺産、その活用により歴史像の構築が如何になされるのか、またそれは既存の歴史像に何をもちし地域の歴史をいかに豊かにしうるのか、また私たちは地域遺産をどのように認識し、その保全・活用のあり方についてはどのように考えるべきなのか。以上のことを目標とした授業実践を行っている。次節でその実践の内容について報告するが、ここでは受講生が高校までの歴史教育においてどの程度地域史教材に触れているか、それによる地域史認識の現状について、受講生の状況を調査した結果を示す。

2011年度分の調査は文系が前掲の「(教)日本史Ⅰ」約30名、理系が「新しい日本史像」約200名である。まず理系の学生についてはその8割が高校で日本史(A・B)を履修していない。そのため多くの受講生の回答は小学校と中学校における歴史教育の記憶にもとづくことになる。まず文系・理系双方の受講生の居住地域における古代、中世、近世、近現代の歴史について問うたところ、各時代とも分からないとの回答がほとんどであり、記述されている回答では城、古墳、人物(例えば山口県では伊藤博文など)などが目立つ。ほかに「この辺りは田んぼだった・沼だった」などの聞き取りの経験が少数ある。それと併せて、小中高の歴史の授業や総合の時間に地域史を教材化したことがあるかどうか聴くと、大和川・淀川の付け替え、地域史の副読本(カルタの作成経験もあった)の活用、古代の遺跡や古墳の見学、地域の用水開発の授業例が若干見られる。これらの例は地域ごとに学校用地域史教材が用意され活用されている例として受け取ることができる。副読本などを使用することで地域の歴史を多面的に掘り下げる歴史学習がなされている例を知ることができるが、その多くは地域の城郭及び古墳など古代遺跡、地域の人物などに偏っている。これは地域の歴史遺産を多面的に認識できていないこと、また恐らく歴史教育において身近な地域遺産を十分に教材として活用できていないことと関係しているであろう。先進的に高大連携の授業を行っていると思われる阪神間地域のM高の出身者が「選択の授業で近くの歴史的に有名な場所を歩いてまわったのを覚えています、神社とか古墳とか、説明してもらいながら回ったな、程度しか記憶にないです。」と記述している1例は、地域の教材化が歴史像構築と無関係なものにとどまっている問題点を示しているものと受け取れる。

## (2) 大学における地域遺産の活用

ここでは『神戸・阪神間の古代史』をテキストとして授業を行った神戸市外国語大学の「日本文化論入門(地域と文化)」(受講者約40名)の実践例と最終講における受講生からの聞き取りをもとに、地域の歴史遺産を活用した地域史像の構築の到達と課題について検討したい。当該大学は神戸・阪神地域出身者及び神戸市などに職場をもつ社会人学生が多く、テキスト・授業内容は受講生にとってかなり身近に感じられるものだった。

まず、地域の歴史の見直しとそれによる日本史像の再構築の前提となる、高校の日本史教科書の古代史像について概観しておきたい。対象は3世紀の古墳時代の始まりから7世紀の律令国家形成に向かう時期である。大和地方で3世紀後半に出現した前方後円墳という独特の墓制はその墓制を共有する近畿から中国地方にかけての広域の政治連合の出現を窺わせるものであり、出現期の最大の古墳の一つが箸墓古墳をはじめ大和にあることから、大和を中心とした近畿地方の勢力がその政治連合の盟主であると考えられている。これをヤマト政権と称する。古墳が最大規模となるのは、古墳時代中期の4世紀末から5世紀にかけてであり、最大の古墳は堺市の大仙陵古

墳、次いで羽曳野市の誉田御廟山古墳であり、これは5世紀のヤマト政権の盟主の存在を示すものと考えられる。ただし5世紀段階では、大和に匹敵する巨大前方後円墳は上毛野、丹後、吉備、日向にも見られ、これは当時のヤマト政権が大和の勢力を盟主としながらも、同盟関係的な政権の構成をもっていたと理解される。5世紀は倭の五王と呼ばれるヤマト政権の大王が中国王朝に遣使を行っていた時代であり、対外的な外交・軍事が大王の力量を示すものと受け取られていた。この時代は後に雄略天皇と呼ばれる大王によって北関東から北九州にかけて中央-地方の関係が制度化しつつあり、政権の宮廷組織の進展もみられた。6世紀に入る頃より古墳文化に変化が見られ、吉備などのかつて巨大前方後円墳を築いていた勢力が減退し、政権の構成は大王優位に展開したと見られる。6世紀には磐井の乱など地方豪族の反乱伝承が見られ、それらの変動を通じてヤマト政権は直轄領の屯倉の設置、名代・子代の部民の設置など地方支配を強化・安定化していったと見られる。仏教の伝来もこの時期であるが、仏教文化は6世紀末から7世紀初頭の飛鳥時代に開花し、奈良盆地南部の飛鳥の地に歴代王宮や豪族の邸宅が集中するようになり、飛鳥は都としての内実を備え始める。飛鳥寺、斑鳩の法隆寺、難波の四天王寺の建立は、河内から大和に入り飛鳥の都へ向かう道を荘厳化する効果をもった。

以上が高校日本史Bの教科書記述から読みとれる教科書的な古代史像である<sup>7)</sup>。ここには日本の古代史は大和(後には飛鳥に固定)を中心に展開し、大和への玄関口としての斑鳩の地や大阪湾に面した河内・難波が重要視されるに過ぎない。吉備、毛野、丹後など列島諸地域の動向は若干登場するが、各地域の古代の歴史が大和政権との関わりでどのように展開したかを認識することはかなり困難といえよう。地域の視点から歴史像を捉え直すことが課題となる。

神戸・阪神間地域(前近代においては摂津国、とりわけ西摂にあたる)における古代の歴史を通じて、大和政権と当該地域との関わり、及び歴史的地域性をどのように認識できるか。授業でとりあげた内容を整理すると、(ア)地域景観;河川河口部が天然の港湾として機能したミナトとしての沿岸部と、南北交通に利用された南北に流れる猪名川・武庫川、東西交通に利用された六甲山の北麓南麓、(イ)古代の信仰対象;沿岸部は海洋祭祀の聖地として、六甲山中には神体山としての独立丘が小地域的な信仰圏を形成し、それは今日の広田神社、生田神社、長田神社などの古社の淵源となっている、(ウ)生業と開発の歴史;海岸部の干潟・低湿地の利用、溜池造成によって開発可能な伊丹台地(行基による昆陽池開拓など)と開発以前の狩猟地・牧などの粗放的土地利用。そこを舞台とした海民、商人、農民の生業、(エ)地域間交通;瀬戸内海-淀川水系の水上交通と山陽道、六甲山北麓の東西交通、及び六甲山を縦断する南北交通、摂津-丹波・摂津-播磨間交通、明石海峡と淡路島の存在、古道の痕跡など、(オ)中央政界からの遠さと近さ;当該地域は飛鳥、難波、平城京、平安京などそれぞれの時期の中央政界からは適度に距離を有しているが、中央政治勢力の後背地あるいは新規開発対象地として中央政治勢力と密接な関係をもつ場合がしばしばあり、そのため戦乱に巻き込まれてきた。

以上が当地域の地域遺産を活用して描出した歴史的地域性とその内容である。古代の神戸・阪神地域(摂津)はヤマト政権の拠点港湾がある難波・住吉津と密接な大阪湾沿岸の諸港湾を構成し、ヤマト政権が大陸と通交するための海上交通を支える位置にあった。さらに六甲山南麓の陸上交通路(古代山陽道)と同様に六甲山北麓の東西交通路と南北に流れる河川流路も内陸交通に利用された。それゆえヤマト政権の当該地域への進出も顕著であり、未開地については国家的な

開発の対象ともなった。当地域は中央政権と密接な関係をもったが中央の歴史に従属していたわけではなく、当地域の地形環境の下で歴史を営みながら文化的景観を形成し、歴史的地域性を育んできたといえよう。

### (3) 高校における地域遺産の活用

高校の歴史教育のカリキュラム上の地域史教材の位置、学習指導要領の規定については前述した。ここでは筆者が非常勤講師として大阪府北河内地域の私立高校で2011年度実践している高校日本史B(高校2年生、4単位)の地域史教材について紹介しておきたい。

縄文時代・弥生時代の授業ではまず当時の河内湾の復元地図を配布した。現在の河内平野が近世の新田開発まではその多くが低湿地帯だったこと、古墳時代以前においては広大な河内潟・河内湖だったことを認識することは、淀川・大和川の流入により土砂が堆積し河内平野が形成されたこと、さらに淀川・大和川の人工的な付け替えを知る前提となる。次いで奈良時代の土地制度や条里制をとりあげる際に、学校付近の明治期の地形図を配布し、条里地割の存在、「池田」地名から条里未施行の低湿地帯の存在を示し、現在の香里園の地名がかつては「郡」地名(郡元町などが現存)であり、郡の中心地だった可能性を指摘した。身近な地域に関心を持たせるとともに、地域遺産としての歴史地名から歴史を復元できる可能性を知ってもらう導入とした。奈良時代の民衆生活の項目では、北河内における行基による寺院造営、架橋、低湿地を土地利用するための堤、溝、樋の遺称地を現地名とともに示し、平城京に近い当該地域における行基の社会事業の実態と意味を考察させた。鎌倉時代の武士の生活の項目では教科書のコラム「地名から中世をさぐる」と併せて、近郊の小字図(旧村単位)を配布し、屋敷地に関わる「垣内」「屋敷」地名、宗教施設に関わる「堂前」「宮前」地名、水田に関わる「田楽田」「河原田」地名、及び武士に関わる「馬場」地名、市関連地名などを示し、大正期ごろの旧景観が残っている地図と小字図の地割を比較させた。生徒は地図上で旧村の集落が密集している地点と屋敷地関連地名の相関を発見することとなる。以上は、あくまで投げ込み教材的な扱いであるが、高校の歴史教育においても身近な地域遺産を活用することにより、「歴史の考察、歴史と資料、歴史の追究」(1999年版学習指導要領・高校日本史B)の実践が可能となると考える。

### 注

- 1) 拙稿「歴史教育と「伝統」—教育基本法「改正」と教育課程の関連を中心に—」『新しい歴史学のために』No.250・251合併号、2002年、49-57頁。
- 2) 塚本学「地域史研究の課題」『岩波講座日本歴史 別巻2 日本史研究の方法』岩波書店、1976年、333-368頁。
- 3) 『岩波講座日本通史 別巻2 地域史研究の現状と課題』岩波書店、1994年。
- 4) 飯沼賢司『環境歴史学とはなにか』山川出版、2004年、9-20頁。
- 5) 古島敏雄『地方史研究法 近代地方史研究と社会科教育』東京大学出版会、1955年、31-32頁。
- 6) 坂江渉編著『神戸・阪神間の古代史』神戸新聞総合出版センター、2011年。
- 7) 『詳説日本史B 改訂版』山川出版社、2011年(2006年検定済)、19-31頁。

## 参考文献

- 飯沼賢司『環境歴史学とはなにか』山川出版、2004年。
- 今井譽次郎「社会科教育と地方史研究」『日本歴史講座』第8巻、1952年、257-274頁。
- 『岩波講座日本通史 別巻2 地域史研究の現状と課題』岩波書店、1994年。
- 白井嘉一『戦後歴史教育と社会科』岩崎書店、1982年。
- 木村礎『村落景観の史的的研究』文明堂、1988年。
- 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『Link 特集 歴史学は地域とどう向き合うか』vol.3、2011年。
- 坂江渉編著『神戸・阪神間の古代史』神戸新聞総合出版センター、2011年。
- 渋谷忠男『地いきからの目—奥丹後の社会科教育』地歴社、1978年。
- 『詳説日本史B 改訂版』山川出版社、2011年（2006年検定済）。
- 高橋明裕「歴史教育と「伝統」—教育基本法「改正」と教育課程の関連を中心に—」『新しい歴史学のために』No.250・251合併号、2002年、49-57頁。
- 高橋愼一「歴史教育と「郷土」」『高橋愼一著作集 第7巻』あゆみ出版、1984年、203-217頁。
- 高柳昌久「地理・歴史教育における地域教材の意義」国際基督教大学『教育研究』50号、2008年、67-76頁。
- 瀧ヶ崎恵一「大学歴史教育論の初歩」『歴史学研究』第609号、1990年、17-28頁。
- 地方史研究協議会編『地方史研究必携』岩波書店、1952年。
- 地方史研究協議会編『地方史・地域史研究の展望』名著出版、2001年。
- 塚本学「地域史研究の課題」『岩波講座日本歴史 別巻2 日本史研究の方法』岩波書店、1976年、333-368頁。
- 日本歴史学会編『日本歴史 新年特集 史跡・景観の保存と活用』第752号、2011年。
- 古島敏雄『地方史研究法 近代地方史研究と社会科教育』東京大学出版会、1955年。
- 古島敏雄『土地に刻まれた歴史』岩波書店、1967年。
- 保立道久「日本中世の教科書叙述と教材」『歴史学研究』第611号、1990年、19-25頁。
- 峯岸由治『「地域に根ざす社会科」実践の歴史的展開と授業開発』関西学院大学出版会、2010年。
- 山口幸男「佐々木清治の郷土地理教育論」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第55巻、2006年、33-46頁。



## Use of Regional Heritage in History Education of High School and University

TAKAHASHI Akihiro (Part-time Lecturer, College of Letters, Ritsumeikan University)

### Summary

In the history education of the high school and the university, the teaching material in the region is not handled enough. The acknowledgment level to the history in the region of the high school student and the university student is not high. The research that clarifies the whole of the history in the region by using regional heritage has progressed now. In the history education of the high school and the university, it is necessary to inquire into educational practice that uses regional heritage. The practice example is shown.

### Key word

History education, historic heritage, regional heritage, regional history

